

アンデス古代文明の諸問題

貞末堯司

目次

1. はしがき
2. アンデスの自然環境
3. アンデス古代農耕の諸問題（特に灌漑施設を中心として）
4. アンデス地帯——古代の人口問題について
5. セツルメント・パターン（Settlement Pattern）について
6. 結語

1. はしがき

新大陸におけるマヤ地域とアンデス地帯に発現した二つの文明には、旧大陸の原始、古代文明にくらべて、極めて特長的な事項を数多く発見することができる。即ち、これら両文明は、大河の恩恵をこうむらない文明であるとか、金属器を知らなかった文明であるとか、また、両文明は、果して内部的な相関関係をもっていたのかどうか、といった問題である。こうした複雑、多岐にわたる問題に対する解答は、或る程度与えられていることは、周知のところであるが、考古学や民族学の資料が、重要な役割を果すこのような問題を取扱う場合、或る基本的な問題を見逃すことはできない。即ち、人間の生活の中から生れ、人間の生活に大きな影響を与えた文明は、それが人間行為の所産である以上、人間がおかれ、文明が育った、その環境を見逃すことはできない。また、人間の行為、人間の生活は、すべて食糧という生命を維持するための栄養源を度外視しては考えられない。つまり、食糧生産は、それが明確な形をとればとる程、文明の発現力となり、文明の母体としての役割を果すのである¹⁾。

このような意味では、農耕生産の問題は、アンデス古代文明のみならず、他の地域においても重要な問題であるのは当然であろう。従って、この小稿においては、アンデス地帯における農耕生産による食糧の蓄積と農耕生産に伴う諸問題について、特に灌漑施設の問題について考えてみたい。

食糧の蓄積、農耕生産の増大は、同時に人口問題をうむ要因でもあった。アンデスの古代の人口問題に関する資料は、極めて限られているが、わずかに、セツルメント・パターンが、少ない資料の中でも有力な解決のための指針となり得るであろう。もちろん、人口問題に関して無視することのできないものに、資源と人口の関係、戦争、病気、民族移動等々多くの問題点²⁾があるが、生物体としての人間には、生物のもつ宿命的ともいえる自然の法則が支配的であることも忘れてはならない。古代アンデスの人口問題も、このような観点から考えらるべき性質のものであろう。

また、セツルメント・パターンとして、人間の住居形式や住居の条件等を観察し、特殊な居住方式の中に、アンデス文明の解決のための鍵があるかも知れないのである。

以上、アンデス古代文明に認められる多くの特質的なものの中から、ごくわずかなテーマを選んで、南米古代文明、それもアンデスという大山塊のふところに抱かれた古代文明を、考古学的資料を主として使用して考察し、その諸問題を論じてみた。

2. アンデスの自然環境

アンデス地方における自然環境は、山岳地帯、海岸地帯、アマゾン東斜面並びにそれに続く熱帯雨林の三つに大別できよう。4～5000mの高峯がつかなる山岳地帯は、居住し得る場所に限界があり、また、海岸地帯にしても、気候上の制約から人間が住み得る場所に大きな限界があったのである。アマゾン東斜面並びにそれに続く熱帯雨林は、高度が1000m以下になると密林が多く、人間の生活に適した土地はなくなり、同時に限られた農耕地しか得られなくなるため、文化とか文明とかいった問題は、おこり得なくなっている。従って、ここ

では、地形上の制約にもかかわらず、文明がおこった海岸と山岳地帯について考えてみよう。

アンデス地帯の西海岸は、フンボルト海流のために熱帯圏に属しながらも、四季を通じてかなりすずしく過し得る気候であるが、古い時代からの乾燥化のために砂漠化した場所が大部分を占める厳しい環境でもある³⁾。ほぼ、5000年以前から、特にペルーを中心とする海岸地帯では、水資源を河川と降雨とに頼る農耕とは違って、霧雨農耕とでもよぶべき特殊な農耕を経験してきた⁴⁾。これは海岸地帯に特有の霧が凝結して、降雨とは違った湿り気を大地に与え、特に川幅が小さく、急流で、しかも短いアンデス西海岸特有の小河川の流域谷には、これが、重要な水資源となり得るものであったし、霧滴に依拠した生活が行われてきたのも事実である。

また、乾燥化が進展し、著しい水資源に困窮を来す場合には、水の確保を目指して灌漑設備が構築された。また、アンデスの先土器期⁵⁾（石期 Lithic）の終末頃にかけて、一時的な人口増加現象が認められるが、人口増加が急速かつ大規模な形で進展すると海岸地帯では、逆に食糧資源の枯渇がおこっている。しかし、このような時に、いわゆる安全弁的な新しい食糧資源となったのは、海浜産の食糧資源であり、さらには、海岸地帯小河川の流域に実行された新しい食糧獲得法の開発であった。これには、まず、農耕地の拡大化のための方策がとられた如くである。つまり、灌漑施設を充実させ、同時に広い農耕地を後背地にもつ農耕村落が形成され、農耕労働の集約化が考えられていた。このことは、海岸地帯川谷の中にしばしば発見される、住居規模の大小及びその密集度から推定することができる⁶⁾。また、このような人口増加に伴う食糧資源の枯渇、そしてそのための食糧増産活動といった循環をしながらも、決定的ともいえる条件となったのは、ペルーの海岸地帯の川谷に見られるような、もともとその土地のもっている有効性ないしは肥沃性であった。特にペルーの西側では、水と少量の肥料を与えれば、土地の生産性は著しく増大するということがわかっているが、これが古代農耕における生産性向上のためのよりどころとなっていた⁷⁾。

一方、アンデス山岳地帯では、或る意味で海岸地帯よりも厳しい自然条件のもとにさらされていた。山岳地帯で人の住み得る環境は、極めて限られたものになり、ラウリコチャ(Lauricocha)遺跡に見る如く、人間が生活し得る極限的な高度にまで、人の生活空間を拡大せねばならなくなっていたのである⁸⁾。また、山岳地帯の有効農耕地は、海岸地帯にくらべてはるかに狭くかつ小さくなり、しかも、土地の肥沃性は、海岸地帯のそれにくらべて劣悪である。従って農耕生産も振わず、農耕生産だけに依拠することは、必然的に不可能になり、狩猟的、採集的な生活形態が続けられたのである。そして、ヤーマ、アルパカの飼育を主とした牧畜が発生し、食糧資源となっていた。

このように、アンデスの自然環境に依拠して、形成期以降、インカ時代を通して食糧生産のための大きな努力が払われてきたのである。農耕、牧畜は、文明の母であるということは確かなことであり、文明の基盤は、自然環境に適応した農耕地とその生産性にあっただとも言えるが、しかし、農耕、牧畜だけでは文明はおこってこない。つまり、文明は、複雑で複合した原因をもつものである。特に、このような要因のあるものだけが、与えられた条件下で活動し得るのであり、その場合に初めて、その要因をとらえて、その文明の特殊性が論じられるのであろう。例えば、低地マヤ地域の熱帯樹林文明やペルーのアンデス文明は、エジプトやオリエント、黄河の沖積文明とは、明確に異なった自然環境要因をもち、その文明の背景と過程は、アンデス古代文明の諸要因が旧大陸古代文明の要因とは異なった条件下で働いたことを示すものであろう。

3. アンデス古代農耕の諸問題（特に灌漑施設を中心として）

アンデスの西海岸では、紀元前6000年頃の食料採集者達のひじょうに貴重な遺跡が発見されており、恐らく当時全海岸で生活した人達の数も、ごく限られたものであったことを推定させる。しかし、食糧採集では、漁撈はひじょうに生産的であり、魚介の食糧源としての役割は十分に果されていたことは、ペルーの西海岸に散在する貝塚からの資料を見ても理解できるところである⁹⁾¹⁰⁾。

しかし、灌漑施設と集約的農耕が開始されると、海岸地帯に多く存在する川谷のどの一つをとってみても、先土器時代(上記、紀元前6000年頃)の全人口を養い得る程の生産性をもったものに成長していたと考えられる。前述の如く地球上に存在したどんな古代文明も、農耕、牧畜という食糧生産活動にその基盤をもち、それから発展してきたものであるのは確かなことであるが、細かい点においては、多少の例外を認めないわけにはいかない。ペルーの海岸地帯では、魚介類の採集は先土器時代を通して経済的に重要な役割をになうものであった。ペルーの中央海岸に出現した神殿や宗教上の建築物は、海岸地帯の食糧経済に依拠して建てられたことがわかる。つまり、ペルーの海岸地帯での農耕生産が、はっきりした形をとる以前の段階ですら漁撈、採集的経済の役割は、このように大きく、宗教的中心地の形成を左右するものであったといえる。

農耕、牧畜が具体化した段階でのアンデス地帯では、さらに都市や帝國的領域の形成が必然的に問題になってくるのである。農耕による食糧生産は、アンデスの場合においても余剰をもたらす、社会的階層の分化が進み、多くの人達を食糧獲得のためだけの労働から解放したものであった。

農耕の最も古い証拠は、中央海岸で発見され、紀元前2000年頃の遺跡である¹¹⁾、アンコン(Ancón)¹²⁾とチルカ(Chilca)遺跡に発見されるカボチャとヒョータン、棉のうち、カボチャは、メキシコ起源であることがはっきりしており、ペルーの初期の農耕は、外来産の栽培植物をもち、特にメキシコとの関係によって成立したことを物語っている¹³⁾。また、アンデス地帯原産種の栽培は、中央アメリカを中心とする北からの刺戟、影響、栽培技法が知られた後になって、初めて栽培されたと考えることができる。しかし、棉とヒョータンは初めペルーの南海岸で独立的に栽培されており、高地の薯類、つまり、馬鈴薯、キノア薯、オカ薯等は、アンデス独自のものであるし、また、熱帯低地でのマニオク栽培は、同様に、これらアンデス原産植物栽培の第三番目のものであるといえることができる。

農耕による食糧生産がもたらす意味は、極めて多岐にわたっている。特に、それが文明の発展に大きな役割を演ずることや、人口増加の直接的原因になり

また、社会的階層の分化や特殊社会の形成などに、大きな影響力をもっていることは、既に述べたところである。

しかし、農耕の及ぼす大きな影響のうち、農耕にとっても欠ぐことのできない、さらに重要な問題がある。つまり農耕の発達それ自体の中に内包されているものは、水資源をアンデスの自然的環境の中で、どのように把握するのか、また、それをどのような方法でとり出して利用するかの問題である。

アンデスの古代農耕における最大の重要問題は、農耕という生産活動を厳しい自然環境に、いかにうまく融合させ、同時にその生産性を高めていくか、ということに向けられていたといっても過言ではない。このことは、特に海岸地帯にとって切実であった。海岸地帯は、乾燥化の進展とともに砂漠化が進行し小河川の流域に帯状のわずかな農耕地を残しているにすぎない。このような限られた農耕地で、多くの収穫をあげるためには、農地の拡大化と土質の肥沃化をはからねばならなかった。しかもこの目的に最も適したものが、灌漑設備を完備することであったのである。しかし、アンデス地帯の自然地形は、河川からの取水を容易にするものではなく、むしろ困難にする場合が多かった。と同時に、海岸地帯で灌漑なしで農耕が可能である土地は、ひじょうに少なく、それは海岸地帯全人口を古い時代、それも形成期中頃を300万人ぐらいと推定すると¹⁴⁾、そのわずか10分の1も養うことができない程、狭くごく限られた地域に散らばっていたにすぎない。さらにアンデス地帯の灌漑にとって不利な条件は、河川のある流域でも水床は、極めて低く、河川デルタのすぐ外側でも、地表下15~30mぐらいにやっと、その水床があったのである。アンデスの西海岸における農耕をめぐる灌漑問題は、このように複雑であり、短い一時期だけで解決されるような性質のものではなかったが、灌漑施設は、少なくとも次のような三つの問題を解決せんがために設けられた如くである。即ち、①農耕適地の拡大、②乾燥期を通して、水を水路の中に確保しておくため、③水の均等な配分を、なるだけ広い範囲にわたって確保すること、の三つである。しかし、灌漑が以上三つの基本的な目的をもっており、そのための水処理が行われたとしても、それは必ずしも簡単な仕事ではなかったのである。海岸地帯の川谷に

は、地形上網の目のような灌漑施設を設けることは不可能であり¹⁵⁾、水路として利用する溝を深くすればする程効果のよい取水が可能であった筈であったがこのような深い水路を掘り割ることは、川谷では不可能であった。従って、この解決策として、形成期の終末から古典期にかけて、ほぼ海岸地帯全域にわたってとられた灌漑施設がある。それは、川谷のできるだけ高い地点に取水口を設け、ここから数本の主要水路(カナル)によって水を導き出し、この主要水路に、さらに小さな水路をはりめぐらすことによって、なるだけ広い範囲に水を分配しようとする方法である。

形成期後半から古典期に及ぶ或る時期での、農耕地を拡大したり、限られた水資源を拡散化して広い地域に水を供給するシステムを建設するといった、この種の作業は、住民相互の共同体的な協同作業を必要としたことは勿論であるが、一方で中央集権的な権威が存在したのも確かである。つまり、この権威は、各川谷に居住する農民達を灌漑施設建設という目的をもった作業に強制し得る権威でもあった。しかし、灌漑施設は、建設完了後も機能的な面が十分にかつ正確に保持さるべき性質のものであり、水路の清掃、水路破損の補修、水路その他に堆積した泥などを排除する作業など、構築よりはむしろ建設後の管理、運営に大きな労力が傾注されねばならなかった。このことは、ペルーを中心としたアンデスの古代農耕に関する一つの重要な問題であったし、各川谷独自の方法による水路の構築やそのネット・ワークが造られたのを見ても古代における集中的な管理方式がとられたことを推測させるのである。

ペルーを中心としたアンデス海岸地帯古代農耕に、灌漑施設が出現する時点では各川谷に何等かの権威が存在し、その統合的な力によって灌漑施設の建設が可能になり、その後の運営が行われたという図式が描けるようであるが、アンデス古代社会において、社会的、経済的に大きな意味をもった灌漑体系は、中央集権的な権威によってのみ維持され得たのであり、逆にいえば、そのような権威の出現する以前には、灌漑体系は、どこの川谷にも発見することはできないのである。しかし、ここでいう中央集権的とでもいえる権威は、勿論、国家的な中央集権をいうのではない。アンデス西海岸地帯に多くある小河川の流

域谷の一つを統轄するか、せいぜい大きくて、その近くの川谷の二つないし三つを統べる権威でしかなかった。このことは、主要な各河川の流域谷には、それぞれ都市的なないしは宗教的な中心が発見され、同時にそれら都市的、宗教的中心は、記念碑的な巨大な建造物（多くの場合、神殿）や巨石記念物をもっており、そこが、その川谷での政治的、宗教的、経済的な中心であったことがわかるからである¹⁶⁾。

このようにペルーを中心とするアンデス海岸地帯農耕の灌漑施設に関してはこの他にも多くの問題があるが、その中でも灌漑施設の構築された時期についての問題がある。アンデス西海岸で最も古い日付をもつ灌漑施設は、宗教上の中心と考えられる神殿をもつ遺構よりも新しい時に作られ、同時に都市が形成された時点か、それよりもやや後の段階で作られていることがわかる。このことは、宗教的中心が形成され、さらにそれ自体が政治的な都市へと発展するか、また、その宗教的中心以外の地に都市が形成されるかした時以降、アンデス西海岸地帯では、農耕に関する新しい知見が導入され、それは同時に灌漑施設をもつ農法を全域的な規模で流行させたものと考えられる。従って、各川谷の政治的中心では、灌漑施設構築の強制が行われたのである¹⁷⁾¹⁸⁾。

ペルーの北部海岸の古典期に出現したモチーカ（Moche）文明には、壮大な灌漑用水路が知られているが、海岸地帯の川谷のほとんどに灌漑施設が設けられるようになったのは、恐らく古典期のモチーカ文明に見られるように、強大な文明の中心が形成され、そこから他の地域へその文化内容が拡大されていった時期であったろう。また、このような時期は、各地域に都市の形成が盛んであり、地域間の抗争がくりかえされ、各地に自己の支配権を守るための城塞が築かれた時でもあった。このことは、増大する人口に対して何とか直接的手段で解決をはからんとする意図があったためであり、農耕地の獲得と並んで、大きな牧草地の必要、住居を作るに適した土地、大きくふくらんだ人口を守るための生活空間の確保などの諸問題をかかえて、海岸地帯にひじょうに激しい動きのあった時期でもあった。従ってこの時期には多くの都市が作られ、北から南にかけて海岸地帯川谷では、灌漑設備を十分に活用した農耕が営まれたと考

えられる。

灌漑体系の完備は、権力の集中化を促進するというのではなく、権力の集中化が行われると灌漑体系の充実がはかられた。つまり、灌漑施設は、文明の結果生れてくるのであって、文明を生むものではない。しかし、前述の如く、一度その構築が完成すると、少なくともアンデスの海岸地域においては、正に生活上不可欠の要因となったのも事実であり、一小川谷から国家的なものが誕生し、さらにはこれが帝國的な強大な国家への発展をもたらしたのは、正にこの灌漑施設の完備如何が、大きな原因となっていたといってもよい。

一方、アンデスの山岳地帯では、農耕における灌漑の問題は、海岸地帯とはかなり様相を異にする。つまり、アンデス山岳地帯では、水は海岸地帯程には必要ではなかった。山岳の斜面を利用した階段畑には、高地特有の湿気があり、多量の雪どけ水が入手できた。このような理由からか、アンデス高地帯の灌漑施設は、ワリ (Huari) やインカ (Inca) などの帝国主義的な軍事国の侵入とともに導入されたものであり、アンデス南部地域に出現した南部諸都市の山岳地帯への征服戦につれて、紹介された農耕法でもあった。このような点からみて、山岳での灌漑施設は、海岸地帯程の意味をもつものではなく、高地文明の発展にも、重要な役割を演ずることはなかったと考えてよからう。

4. アンデス地帯 —— 古代の人口問題について

古代における人口問題は、食糧供給、それも農耕、牧畜が存在するところでは、その生産性に深い関係をもっている。考古学的資料によって、直接人口問題を論ずる場合には、一、二の前提を考慮しなければならない。一つは、生物体としての人間は、動物と同様自然界の法則の枠外にはないということであり、現在までのアンデス地帯での人口資料を基盤にすると、①食糧が豊富であれば、自然の動物が多くいなくても人口は増加する。②人口の割には食糧は少ないが、自然動物が豊富である場合には、人口はかわらないか、減少するかである。③食糧供給と自然の動物量に変化がなければ、人口は均衡し、次第に環境に最も適合した数で安定する、ということである¹⁹⁾。現代社会のように人口

統計が正確に行われたわけではなく、人口を遺跡、遺物等を資料として推定するという事は、かなり限界のある仕事であるが、ペルーを中心とするアンデス地方では、食糧供給の限界をこえて人口増加が発現したために、飢餓その他の悲惨な状況で、逆に人口減少がおこったという考古学上の証拠はない。現在より以前約5000年ぐらいの間、少なくとも食糧供給とペルーの海岸地帯の人口は均衡を保っており、小さな変化はあっても、両者の均衡は当分は続くものと推定される。しかし、食糧供給と人口との均衡が崩れて、文明が没落していった例は人類文化史上知られてないわけではない。特に中米の低地マヤ地域に栄えたマヤ古典文明は、スペイン人の侵攻した16世紀初頭以前、すでに亡び去っていたのである。マヤ古典文明滅亡の原因に関しての若干の有力な説の中で、食糧供給と人口との不均衡をあげているものもある。つまり、古典期からマヤの人口は恒常的に増加し始め、スペインの侵入した16世紀以前には、既にマヤ地域の地味はやせおとろえ、十分な食糧供給をする能力は失われていた。このため多くの努力がなされたにもかかわらず、遂に慢性的な食糧不足をきたし、人口は次第に減少し始め、各地で都市が放棄され、ユカタン、ガテマラの密林の中にその文明は消えていったのである²⁰⁾。

人口は、文明の尺度としての一面をもっている。人口が多くなれば、ふくれた人口を組織するための新しい機構が考え出され、従来の組織や生活習慣とは異なった新しい生活が発展してくる。アンデスの古代における人口問題も恐らく基本的には、以上の様な性格をもっていたと考えられる。アンデス地方では、人口問題を考古学的資料によって解明する場合、前述の如く基本的な前提となる事柄と並んで、二つの困難な問題がある。一つは、ある与えられた時での、耕作可能及び耕作中の農耕地の総面積の推定が可能であるかどうか、二つは、その時点での自然の動物群が、どのような役割を果たしたかを正確に評価できるかどうか、である。この問題に関して正確な解答を与え得る資料は現在の所存在しない。ペルーでは、遺跡、特に貝塚に堆積された遺物の内容を質的に分析し、かつ、その時代の住居の数の計算が行われていないので、人口数を推定するのが困難であるが、海岸地帯の農耕面積は、古代でも現代でも大差なく、特

に古代の灌漑設備の水路等が考古学的に追求され始めているので、農耕地のかなり正確な面積の算定も近い将来には可能となろう。また、単位面積あたりの収穫量は現在のペルーの海岸地帯農地の収穫量と大差ないものといわれているが、近代農業では、金肥、機械力等の利用により農民一人あたりの生産性は、はるかに古代をしのぐものがあるだろう。従って、古代の貝塚、住居址、集落址等の堆積物の内容を詳細に吟味、分析して植物及び動物の遺残から当時の収穫量を推定し、現代農業との比較の上で単位面積あたりの収穫量を割り出し、その総量から古代の人口に消費されたであろう総カロリーを計算することは可能であろう。事実、遺跡と遺物の分析による以外、古代の人口の推定は困難である。

アンデス地方の古代の人口については、この他に戦争による人口増減の問題がある。戦争は、古典期末から後古典期にかけて、急激にふえていった。各都市間、各川谷間、さらには国家的領域をもった強大な都市国家間の戦争では、多くの者が殺され、多くの者が捕虜となった資料がある。このことは、前述の灌漑水路の構築と関係をもったようであるが、小規模な争いから大規模な征服戦まで、様々な形の戦争が行われた中で、ワマチュウコ (Huamachuco)、クエルパ (Kuelpa) 等の遺跡は、防衛都市として建設され、稠密な人口を養っており、政治的な支配は、極めて強固に行われていたようである。

5. セツルメント・パターン (Settlement Pattern) について

アンデス地方に個々の人間の生活址である住居址、それらが集って形成された集落址、さらには、それらの発展した都市といったような、その規模や構造は異なっているが、はっきりした人間の生活遺構が現われたのは、形成期の初頭頃からであろう。アンデスの古代文明は、かなり古い歴史をもっており、洞窟や岩陰の生活址とかいったものは、形成期よりはるか以前にさかのぼる生活の跡であるが、ここでいうセツルメント・パターンとは、このようなものを指すのではなく、はっきりとした意図のもとで作られ、目的と規模、構造、何等かの生活手段をもって形成された住居並びに住居を中心とした人間生活一般の建

造物を含んだ、いわゆる「住居の型」をいうのである。このような意味において、まず、アンデスの最初のセツルメント・パターンとして、宗教的中心の形成、次に都市の形成をあげることができよう。宗教的中心の代表的なものをあげるとリオ=セコ (Rio Seco), ラ=フロリダ (La Florida), アンコン (Ancón), ラス=アルダス (Las Haldas), クレブラス (Culebras), コトシュ (Kotosh)²¹⁾ 等である。これら遺跡は、いずれもペルーの北中部に位置しており、このことからアンデス文明の起源地は、ほぼこの地域であることを暗示しているが、これら諸遺構が建てられた当時は、紀元前2000~1500年というかなり古い時期であった。従って人口も稠密ではなく、山岳部、海岸部ともに狩猟、漁撈的な経済活動で十分にまかない得たのである。しかし、その後チャビン(Chavín)文化が、アンデス地帯を広くおおおうようになると、ここに一つの変化がおこってきたことがわかる。チャビン文化は、チャビン=デ=ワントル(Chavín de Huantar) という宗教都市を中心として影響力を周囲に及ぼしたが、この文化の拡大につれて、各地にいわゆる都市が形成されていった。しかし、南部では、都市は比較的狭い地域に形成され、人口の稠密化が問題になり食糧資源の確保のために、耕作可能地を拡大するのに都合のよいように、人口を定まった地域に集住させた傾向がある。例えば、パラカス=ネクロポリス (Paracas Necropolis) では、一つの放棄された住居に 429体のミイラが埋葬されていた例があるが、これなどは、ペルー南部地域の都市形成の特長を示しているものと考えられる。

宗教的中心地の形成後、都市が誕生し、人間の生活は、この都市を中心として行われるが、都市は当時の恐らく政治、宗教、交易、工芸、工房による手仕事など、すべての機能を集中的に行っていたものと考えられる。ただ、農耕には、多くの労働力が必要であり、播種、収穫等の時期には、権威によって、多数の労働力が農耕地に投入されたものと考えられる。後古典期になり、強大な軍事的国家が出現し、アンデス全域に爆発的な勢で覇権を確立すると、今までの都市の多くは放棄され、征服者によって建設された都市が出現する。この最もよい例は、ワリ (Huari) 及びティアワナコ (Tiahuanaco) の軍事的征服をあげ得るが、インカによる全アンデスの統一は、さらにその規模を上まわるもの

であった。征服による都市の建設には、軍事都市としての性格をもつ城塞都市が築かれ、新しい住居様式、生活のパターンが強制された如くである。しかも城塞を中心とする人口の集中化現象もみられ、インカ統一帝国成立の前段階としてのセツルメント・パターンが見られるのである。しかし、このような都市構造の中でも、例えば、パチャカマック (Pachacamac) は例外をなすものである。中部海岸のこの巨大な宗教都市は、宗教都市の本質を失なわないまま大都市に発展したものであり、古くからの神託の権威を保持するため、他からの占領があっても、宗教的伝統は失なわなかった。そして、宗教上の権威によって多くの人を集め、大都市の様相を呈したのである²²⁾。

アンデスにおけるセツルメント・パターンの問題は複雑であり、さらに多くの資料によらなければ、にわかには結論の出せないものもあるが、ペルーを中心とした地域でのその変遷の歴史は、或る意味で、アンデス古代文明の基本的な問題の解明に通じるものがある。

6. 結 語

アンデスの古代農耕は、恐らく北からの刺戟によって開始されたものであろう。そして、多くの栽培植物の存在によって、かなり高い生産量をもったものと考えてよからう。ただ、植物栽培は、主として海岸地帯で始まり、山岳地帯では、ヤマ、アルパカの飼育を主とした牧畜が行われたのであり、このいわゆる食糧生産活動は、灌漑体系の発展につれてさらに進歩し、トモロコシ、馬鈴薯、豆、マニオク等が栽培され、食糧の供給は不安なく続けられた。しかし、これには、急速で、しかも大規模な人口増加がおこってきたが、アンデスの自然環境は、多くの人を比較的狭い地域に集住させるような結果となった。こうして、複雑な組織が作り出され、将来の繁栄を保障せんがために、特別の住居形式が誕生したのである。

アンデス古代文明は、本質的には、自然環境の極端に大きな影響をうけて成立したものであるということができよう。そして、文明の成立には、新大陸の場合にも食糧生産という、いわば食糧革命がその基盤にあり、農耕は、灌漑施

設の充実によってさらに発展し、人口増加とともに、文明は、さらに一段と発展するが、最終的には、インカの統一によって、極めて等質的な内容をもってくるようになった。つまり、インカの統一以前に、チャビンの精神文化が広くアンデスに広がり、その後、ワリ、ティアワナコなどの軍事国家の支配が、ペルー、ボリビアを中心とする全アンデスに行われるが、これらは、インカの統一にくらべると、その規模も内容も共に劣っているといわねばならない。アンデス古代文明は、この意味で、支配と被支配の歴史であったともいえる。

以上、南アメリカのアンデス地帯の古代文明の諸相の中で、問題になる二、三の項目を抽出して論じてみたが、尚、道遠しの感を禁じ得ない。

〔註〕

- (1) チャイルドは、人間が最初に経験したこの食糧生産を第一次産業革命と呼び新石器時代に比定して新石器時代革命と呼んだのはよく知られているが、南米に関しては、Choy, E.: *La revolución neolítica en los orígenes de la civilización americana. Antiguo Perú. Espacio y Tiempo.* pp. 149—197. Lima. 1960を参照されたい。
- (2) Petersen, W.: *A Demographer's View of Prehistoric Demography.* in *Current Anthropology* Vol. 16. No. 2, pp. 227—237. Chicago. 1975.
- (3) Doig, F. K.: *Arqueología Peruana.* pp. 55—76. Lima. 1971.
- (4) いわゆる“Lomas”とよばれるもので、霧滴による植物帯をいう。
- (5) ここでいう先土器期 (Pre-Ceramic Period) とは、新大陸文化階梯として考えられる石期 (Lithic) を指す。
- (6) Patterson, Th. C. and Edward P. Lanning: *Changing Settlement Patterns on the Peruvian Coast. Ñawpa Pacha* pp. 113—23. Berkeley. 1964.
Lanning, E. P.: *Peru before the Incas* pp. 57—140. New Jersey. 1967.
- (7) Doig, F. K.: *op cit.* pp. 93—98, 148—150. 1971.
- (8) Cardich, A.: *Lauricocha, Fundamentos para una Prehistoria de los Andes Centrales.* *Studia Praehistorica III* Centro Argentino de Estudios Prehistóricos. Buenos Aires. 1964.: *Los yacimientos de Lauricocha. Nuevas interpretaciones de la Prehistoria Peruana.* Buenos Aires. 1958.
- (9) Willey, G. R. and John M. Corbett: *Early Ancón and Early Supe Culture.* *Columbia Studies in Archaeology and Ethnology.* Vol 3. New York. 1954.
- (10) Franch, J. A.: *Manual de Arqueología americana.* pp. 587—589. Madrid. 1965.
- (11) Bird, J. B.: *Pre-ceramic Cultures in Chicama and Virú.* in *A Reappraisal of Peruvian Archaeology.* (ed.) Wendell C. Bennett. *Memoirs of the Society for American Archaeology.* No 4. pp. 21—28. Menasha 1948.

- (12) Willey, G. R. : op. cit. 1954.
- (13) 栽培植物の問題に関しては、多くの文献をあげ得るが、ここでは、Sauer C. O. : Cultivated Plants of South and Central America. in Handbook of South American Indians. (ed.) Steward J. H. Bulletin 143. Bureau of American Ethnology Vol. 6. pp. 487—543. Washington. 1950. Agricultural Origins and Dispersions. Th. American Geographical Society, New York. 1952. Whitaker, Th. and Junius Bird: Identification and significance of the Cucuribit Materials from Huaca Prieta, Peru. American Museum Novitates, No. 1426. American Museum of Natural History. New York 1949. 等をあげておく。
- (14) Willey, G. R. and John M. Corbett : Prehistoric Settlement Pattern in the Virú Valley, Peru. Bulletin 155. Bureau of American Ethnology. Washington 1953.
- (15) 西海岸の河川は、アンデスからの大量の礫石と土砂で、その岸辺周辺は埋っており、取水、掘溝等の土木仕事には多くの困難が伴う。
- (16) Lanning, E. P. : op. cit. pp. 57—79. 1967. Franch. J. A. : op. cit. pp. 582—601. 1965.
- (17) Mason, J. A. : The Ancient Civilizations of Peru. pp. 55, 59—97. London. 1957.
- (18) Means, Ph. A. : A Study of Ancient Andean Social Institutions. Connecticut Academy of Arts. and Science Transactions. Vol. 27. pp. 407—469. New Haven. 1925.
- (19) Lanning, E. P. : op. cit. pp. 182—189. 1967.
- (20) Rathje, W. C. : Praise the Gods and Pass the Metates: A Hypothesis of the Development of Lowland Rainforest Civilizations in Mesoamerica. in Contemporary Archaeology (ed.) Mark. P. Leone pp. 365—392. London. 1973.
- (21) Seiichi, I. and Toshihiko Sono. : Andes 2. Excavations at Kotosh, Peru. Tokyo University Press. Tokyo. 1963.
- (22) Uhle, M. : Pachacamac. Philadelphia 1903. Mason. J. A. op. cit pp. 100—158. 1957.